

# 研究大学が目指す高等教育

## 大学教育の原点、教養教育



井上 明久

(東北大学総長)

はじめに(日本の高等教育改革について)

日本の高等教育制度の歴史を省みると、二度の大改革が行われている。はじめは、日本が近代社会に変貌し欧米列強に追いつき肩を並べるための「明治維新の学制(明治)」、次に第二次世界大戦後の国家教育体系の抜本的改革のための「学制改革(昭和)」が挙げられる。そして今、近年の日本の財政悪化による行財政改革に関連して行われた「国立大学法人化(平成)」は日本の高等教育における第三の大改革に位置づけられるのではないだろうか。明治および昭和の教育制度改革は外圧による国家体制の変化によってもたらされた改革であり、ある意味では教育の標準化に向かう改革であったように思われる。しかし第三の教育改革である国立大学法人化は逆に標準化から多様化へ向かうベクトルを持つのではないだろうか。

国立大学は平成一六年に国立大学法人として新たな出発をした。法人化とは、従来、国の行政組織(文部科学省)の一部であったことによる予算、組織等にかかる各種規制を大幅に縮小し、個々の国立大学法人が、そ

れぞれの特性やアイデアに基づいて、教育研究活動の方針を立て、独自の財政基盤と組織をもって自立的な経営を行うことを意味する。それ故にこれまでの日本の高等教育改革とは性格を異にし、標準化から多様化へと進む、国立大学が創立されて以来の大改革といっても過言ではないであろう。もちろんこの改革には賛否両論、利点欠点の指摘など様々な議論がある。また、まだまだ実施体制の不備があり、多くの大学で戸惑いがあること認識している。しかし日本の大学全体を鳥瞰する視点で見ると、各大学が独自の特徴を創造することが可能なシステムになっていくことは、各大学の教職員や学生等構成員の発想や努力によって、教育の多様性、質の向上、創造的独創的研究の展開、より開かれた大学としての社会貢献などが盛んに行われるようになることが期待される。同時に、各大学の教職員の意識の高揚、学生諸君の愛校心の高まりをもたらし、教職員・学生がイコールパートナーシップを持って自らの大学造りへ参画することにつながる絶好の機会であると受け止めることができる。また、さらに各大学が独自の特徴を創り示すことができれば、画一化傾向にあった日本の大学が真の意味で多様化へと向かっていき、公立、私立大学を含め、世界に誇れる日本の大学教育の創造に向かう機会ともとらえることができると考えられる。ただし、どのような改革にも共通することであるが、日本の大学がこの改革に真剣に取り組み、真の意味で独立し、特徴ある大学となることができればという条件を忘れてはならない。

### 教養教育の重要性

どのような改革が行われようとも、大学の使命は教育と研究であることに変わりはない。また、研究だけでも、教育だけでもない。たとえば研究に優れた大学では、個々の研究者の地道で絶えざる研究とその成果の蓄積は勿論のこと、その知に裏付けられた脈々とつながる研究室の伝統が存在する。しかしそれだけではなく、研究室の中の教員と学生との飽くなき論議による無意識的教育など、教員の高度な研究を通じた熱心な教育があったからこそ優れた研究が成し得たものと考えられる。だが、研究室における教育だけではこれまでの成果

を上げることができなかったのではないか。新たな視点、独創的発想、創造的手法などは寧ろ専門に入る前の教養教育が基盤になっているのではないか。創造的研究には単に深い知識だけでなく、広く様々な分野の知識と物事を洞察する力、そして考えをまとめる構想力が必要不可欠である。このような力は、以前には旧制高等学校で行われていたような教養教育で得られていたのではないかと振り返っている。

しかし、一九六〇年代以降の大学は社会の変革に伴う教育理念やシステムの変化があり、教養教育の必要性が大きく歪められ、ついには一九九〇年代に日本の多くの大学がそれまで一般教育を担ってきた教養部を廃止してしまった。確かにその体制の変革には一定の効果と新たな教育システムへの脱皮ができたように思われた。だが、多くの大学において再度教養教育の重要性が指摘されるに至り、二〇〇二年には中央教育審議会から「新しい時代における教養教育の在り方について」と題する答申が出された。ここでは学問の専門化、細分化、体系的知識よりも断片的情報の偏重、効率優先・精神軽視の風潮の中で求められる「教養」について議論されている。そして教養の全体像として「変化の激しい社会にあって、地球規模の視野、歴史的な視点、多元的な視点で物事を考え、未知の事態や新しい状況に的確に対応していく力」と総括している。大学のみならず、日本全体における教養教育の必要性が強調されている。

しかし、新たな教養教育とは全国的に行われていた画一的な教養教育を意味するものではない。各大学が各大学の目標、特徴に沿った教養教育を創造することであり、大学教育の根幹をなすものと位置づけられるものであるべきと考える。

### 東北大学の求める教養教育

さて、東北大学は明治四〇年（一九〇七年）に創立され、昨年百周年を迎えた。本学は建学以来「研究第一」、「門戸開放」、「実学尊重」の理念を掲げ、理工学分野をはじめとする多岐にわたる分野で歴史に残る研究成果を世界に発信し、人類社会に貢献してきた。その伝統は今に引き継がれ、研究大学としての位置づけを確実に

してきたと認識している。しかしその本学も一九九三年に教養部を廃止し、教養教育に責任を持つ部局をなくし、全学的に一般教育を実施する体制へと変遷し、そして今、新たな教養教育の在り方を模索し始めたところである。そのような時期に本学総長に就任することになった私は、これからの大学の在り方、そしてこれからの東北大学の在り方を思考し、アクションプランとして「井上プラン二〇〇七」を公表した。これは、知の継承体としての「教育」、知の創造体としての「研究」、世界と地域に開かれた大学としての「社会貢献」、それを成し遂げるための「キャンパス環境」の整備、知の経営体としての「組織・経営」の五つの柱にまとめたものである。このアクションプランの第一番目に「教育」を位置づけ、そのまた筆頭に「大学教育の根幹となる教養教育の充実」という項目を掲げた。

大学はどのような形であれ、その最も基盤となるものが創造した知の継承であり、その継承者を広く社会へ輩出することが本学の主要な社会貢献の一つになると考える。特に研究大学を標榜する本学では、何事にも積極的な知的好奇心を持って挑戦する気質、幅広い視点と柔軟な思考ができる基礎学問を身につけて新たな知を創造できる能力、そしてそれを全世界の人類社会に貢献できる革新力を備えた学生、すなわち世界で活躍できる総合的人間力のある学生を育成したいと考えている。これまでも本学は、高校生からの「学びの転換」を求めて専門にとらわれない少人数教育の「基礎ゼミ」を、部局の枠を超えた学生のグループに開講し、理系や文系にとらわれない多様な思考、多様な人間との交流を実現してきた。また、科学的思考、実験的手法を体験することを目的とした文科系の学生を対象とした理科実験の創出など、多くの教養教育に関する改革を実施してきた。この新たな試みは学生の学習意識、意欲を高める効果が認められた。

しかしこれで改革が完成したとはいえない。教育の質を高め、学生の学習意識の高揚には、教育成果の検証と進展のための不断の改善を行っていく必要がある。そこで本学は、これまで培われた東北大学の改革気風をさらに進化させ、教養教育の重要性を再度、認識を新たにするとともに、さらなる教員、学生の教養教育に対する意識の向上を求めている。その施策として、研究成功体験に基づく科学の面白さ、研究の楽しさや苦しきなど、研究室で行われてきた飽くなき討議による無意識的教育をイメージした講義を教養教育に取り込むべく、

教育、研究に卓越した経験を持つ本学の退職教員を「総長特命教授」として活躍していただく制度を発足させた。また、学生が様々な体験を自分の思考に取り入れること、あるいは自分の思考を広く世界に発信することこそが国際性豊かな学生を育めるものと考え、英語をはじめとする語学教育にも力点を置くようにカリキュラムの改善を行っている。さらにこのような不断の改善を推進するために総長を議長とする「教養教育改革会議」を発足させると共に、総長特命教授が所属する「教養教育院」を立ち上げ、高等教育の研究および実施組織である高等教育開発推進センターとともに、東北大学独自の新たな教養教育を創出していく第一歩を踏み出したところである。

教養教育は大学の一、二年生に必要な基礎学問ととらえられがちである。確かに本学の教養教育改革の第一歩は一、二次学生から始めている。しかし、本学が研究大学であることを考えれば、教養教育は大学院生にも必要不可欠である。この点、総長特命教授を含め、本学において卓越した教育研究成果を発信している教員による大学院生対象の「高度教養教育」なるカリキュラムが設けられることを期待している。研究大学としての教養教育の在り方をこれからも全学的議論の中で追求し続けていく所存である。

## おわりに

国立大学法人化という第三の高等教育制度改革をどのように大学改革に生かせるか、全国の国立大学法人とともに、競争ではなく、協調して世界に向けて発信していきたい。グローバル化、国際化とは明治、昭和の改革のように相手に学んで行くことだけではなく、平成の改革では日本の独自性、世界が学びに来なくなる大学で溢れる日本の大学改革になって行きたい。東北大学はその一つとして比類なき特徴を創造することにチャレンジして行きたいと考えている。